

埋文 とやま

Toyama Prefectural Center for Archaeological Operations

2025.3.31

VOL.

170



加納南9号墳出土品（氷見市加納）
《馬具 ^{くもがた} 轡》

^{くもがた}轡は人間が馬に、行きたい方向や止まる指示などを伝えるものです。写真中央は轡、左右にあるのは引手と呼ばれています。轡は馬の口に噛ませます。人間で想像すると歯で挟んでいるように思われますが、馬の歯は前歯と奥歯の間に隙間があるので、その隙間に収まります。引手は、轡と手綱をつなぐ部分です。これらの馬具の出土から、古墳時代には富山に馬がいたことがわかります。

とっておき埋文講座① ● 舟橋村浦田馬渡し遺跡の発掘調査

② ● 深みにハマる季節 - 富山南道路建設に先立つ試掘調査より -

③ ● 出土イネが語る日本と北陸の歴史

Center Flash ● 催しガイド2025

古写真発掘！ ● 細島遺跡 南砺市上平細島

富山県埋蔵文化財センター

舟橋村浦田馬渡し遺跡の発掘調査

とっておき埋文講座①

はじめに

浦田馬渡し遺跡は、富山平野のほぼ中央にある舟橋村南部の海老江地内に位置し、南東に接する立山町にも広がっています。

発掘調査の多くは、開発行為があるときに私たちの先人が残した生活の痕跡を記録保存するために行います。今回は、関西電力株式会社の高圧送電鉄塔建替移設工事に先立って行われました。



調査風景 既設鉄塔がバックにみえます

発掘調査対象地は、標高約13mの水田内、一辺約13.5mの正方形の範囲です。地中に残っている遺構等が影響をうける範囲を調査するものです。

桜舞うなか

発掘調査の前には、試掘（確認）調査が行われます。試掘調査によって、埋蔵文化財の所在の有無や範囲の把握、発掘調査にどれくらいの期間や費用がかかるかの情報を得ることができます。浦田馬渡し遺跡の試掘調査は、令和5年12月4日に実施されました。

この試掘調査結果をもとに、協議や発掘調査のための準備を進



発掘調査位置

め、桜がほころび始めた令和6年4月8日から新緑におおわれる4月26日までの実働9日間で発掘調査を実施しました。

中世の集落…？

調査員立会いのもとバックホウにより行う表土や盛土の除去から始まり、遺物包含層掘削、遺構検出、遺構掘削を作業員さんとともに人力で行いました。

遺構は、掘立柱建物3棟、柵2列、溝1条、15基の土坑と自然流路がみつかりました。掘立柱建物のうち1棟は総柱構造をもち、柱穴の埋土などから、時期は中世前半頃と考えられます。



人が立っている位置に柱穴があります

他2棟については、比較的細い柱で構成される側柱構造で、埋土が総柱建物とは異なること等から、

時期はやや下ると考えられます。

自然流路は、建物・土坑群の近く、調査区内の半分ほどを占めて検出された大規模なものです。片岸が調査区外のため流路幅はわかりませんでした。この自然流路の堆積土からは、上流から運ばれる過程で摩耗した縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器等の小片を確認できました。

遺物は全体的に少量で、主に遺物包含層の黒い土から縄文時代から中世の遺物が出土しましたが、遺構の時期を確定できるものではありませんでした。縄文土器は晩期、弥生土器は後期（天王山式）にほぼ限られると考えられます。

おわりに

現代の私たちが安心・安全に電力を使用するのに必要な鉄塔建替工事に先立ち行われた発掘調査の結果、中世はじめ頃に小さな集落があったことがわかりました。

このような調査の積み重ねによって、少しずつではありますが、地域の人々の過去の暮らしや歴史が解き明かされていきます。

（島井瑞希）

深みにハマる季節 ―富山南道路建設に先立つ試掘調査より―

とっておき埋文講座②

秋深し

埋蔵文化財センター調査課の秋は試掘調査の季節である。

試掘調査はさまざまな開発事業に先立って行うが、事業予定地や隣接地は現役の田んぼであることが多いため、稲刈が終わるのを待ってようやく我らの出番が来る。

昨秋は富山南道路の予定地で試掘調査を行った。富山市南部の塩沼割遺跡しおぬまわりと長走B遺跡ながしりの2箇所、どちらも旧大沢野町域で国道41号線と神通川に挟まれた田んぼや畑である。

収穫後の稲株からは黄緑色の新葉が伸び、現場はのどかな景色が広がる。田んぼの数カ所に、幅1m、長さ10m前後のトレンチと呼ばれる溝を重機で掘り、土層の堆積状況や遺物・遺構の有無を確認し記録をとる。

かつての生活痕が見つかる深さは遺跡によってかなり異なる。また開発事業の内容や、工事の諸事情によって影響が及ぶ深さも違うため、試掘調査で掘る深さは必ずしも一律でない。

富山南道路の場合は永久的構造物の建設のため遺跡は失われてしまう。そこで安全上、掘れる深さまで掘って確認を行った。

重機での掘削は後退しながら、刃先を地面と水平に奥から手前に引く動きを指示する。少しずつ土を剥がすようなイメージで。ここでは重機オペレーターさんとの意思疎通も大切なポイントだ。

小さい土器みつけた

塩沼割遺跡は神通川養魚場に近い段丘の下。計8本のトレンチを掘ったが、初めの3本は空振り、4本目以降から土師器の破片が出始めた。7本目、地表面から約40cm掘り下げた地点で穴や溝、井戸が見つかり、古代～中世のムラと考えた。現地は区画整備した田んぼだったので、微地形は削られて遺跡は残っていないかも?と予想していたが、その一部には遺跡が残っていたのだ。

長走B遺跡は春日温泉に近い段丘裾。12本のトレンチのうち半数で穴や溝、陶磁器類が見つかり、古代以降のムラが全体的に残っていると考えた。ここは畑造成の際にかなり厚く盛土されていたため、深さが1mを超すトレンチがいくつもあった。旧地形の起伏、一定ではない堆積、と一筋縄ではいかな

いこの遺跡。そしてずっと気になっていた、なぜ縄文土器が出るのか?の疑問は調査最終日に解けた。古代以降の遺構が見つかる土層のさらに下、縄文土器の混ざる層があったのだ。安全上、ギリギリの深さまで掘り下げると、トレンチ壁に縄文土器が埋まっているのが見え、一部に縄文時代晩期の層が存在していることがわかった。

奥深い試掘

遺跡は表面に落ちている土器などからおおよその範囲を推測するが、実際に掘らないと詳しい内容はわからない。広大な遺跡を細い溝で迅速に理解し、判断することはとても難しく、豊富な知識と経験が必要だ。さわやかな秋晴れの下、ああでもないこうでもない、と試掘という沼にハマりながら調査課の秋は深まるのである。

(町田尚美)



深い! 長走B遺跡のトレンチ

出土イネが語る日本と北陸の歴史

とっておき埋文講座③

弘前大学人文社会科学部 教授 上條 信彦

はじめに

多くの方はご存じかと思いますが、イネは日本列島が起源地ではありません。よく和食の文化というお米だと思われそうですが、和食の形自体が出来上がるのは古代以降で、それより昔の日本列島に住んでいた人たちは、お米を和食という概念まで持っていくところまでは、まだ行っていないと思います。

では、稲はどこからどのように日本に入ってきたのかということから、話を進めていきたいと思います。

栽培イネの故地と稲作の北限

現在、稲の栽培の起源地というのは中国の長江の下流域から中流域辺りとされています。それが今から大体1万年前の出来事です。日本列島には、大体7000年ぐらいかけて入ってきます。

栽培化についてですが、野生のイネは粒のばらつきが大きく、1つの穂になる粒の数も多くはないので、人の手によってその中から良いものだけを選抜していきます。また、植物は普通、穂が実った後、種子が落ちるのですが、そうすると稲刈りが難しくなってしまいます。脱粒性の高い低いも、野生イネが栽培イネかの判断基準になります。

次に、農耕拡散についてです。まず、同じ東アジアでも中国の北と朝鮮半島ではアワ・キビ、中国の南ではイネ、日本列島ではクリなどの堅果類に、人間が何らかの形で手を加えることが始



図1 中国東北～朝鮮半島における農耕拡散ルート（宮本一夫 2017『東北アジアの初期農耕と弥生の起源』同成社より）

まりました。

宮本一夫先生は東北アジア農耕の拡散過程を4つの段階で説明されています（図1）。第1段階では紀元前3300年ごろ、アワ・キビ農耕文化が華北から一気に朝鮮半島の南の方まで到達します。しかし九州では受け入れた証拠はみつかりません。縄文文化の狩猟、採集、漁撈という経済体系が比較的安定的だったからと考えられます。

イネはずっと後の第2段階、紀元前2400年ぐらいに山東から遼東半島まで来ます。この時の稲作は、畠作農耕の1つとして広がった可能性があります。

第3段階の紀元前1500年から、朝鮮半島へ水稻農耕文化が拡散します。この影響が、第4段階として紀元前8世紀ごろの日本に到達します。この時は、農耕に関わる技術や社会構造を伴います。確かに、縄文時代にも稲作は伝わっていたかもしれませんが。しかしそれが文化として、生業や暮らしの一部として定着していたかが重要です。

この水稻農耕文化が入るルートは、おそらく中国の長江の下流域の文化が山東半島、遼東半島を経由して改変されつつ日本列島にきたと考えられています。日本列島に入ってきた稲は、列島内でも違いが見られます。

南方起源だったイネは本来では生育が難しい北東北に、弥生時代の比較的早い段階に導入されます。青森県砂沢遺跡では弥生時代の前期後半、今から2300年ぐらい前のイネや水田が見つかります。このことは、今ほどでもないにしても人の手が加えられた結果、北限を更新したと思われます。それから200年後の2100年前には、青森県垂柳遺跡で水田が560枚以上も見つかることから、本格的な灌漑水田ができる状況までの技術水準に到達していました。

こうしたイネの拡散時期の問題を探るには、種子圧痕が有効です。小さな空洞がある土器がたまに見つかります

が、この空洞は土器を作る際、粘土をこねている間に植物の種が混じり込み、土器を焼いた後、空洞となって残ったものです。そこにシリコン樹脂を流しこんで型をとり、電子顕微鏡で見えます。セム・レプリカ法と呼ばれていますが、これにより稲の拡散時期の研究が盛んになります。

稲作がされていると直接的に判断するには、水田などの栽培地が見つかることと、時期が明確な土器からイネ圧痕が見つかることが重要です。

2700年前頃、九州に入ってきた水稻農耕は、400年ぐらいかけて東北部まで達します。注目してほしいのは中部高地や関東では、東北部よりも稲作の導入が遅れることです。稲作は単純に南から北に入ってきたわけではなく、海を飛び越えることも考慮しなければいけないということです。また、稲作が入ってきたのは知っているけれども、現地の人が受け入れていない可能性もあります。

イネの三つの品種

イネには大きく分けて、熱帯ジャポニカ、温帯ジャポニカ、インディカの3つの品種があります（図2）。今、私たちが食べているお米は、温帯ジャポニカ系が主流です。温帯ジャポニカは背が低くて穂が短く、1株あたりの穂の数が多い。1本の稲からたくさんの実がなるのですが、養分もたくさん必要となります。そのため発明されたのが、水田です。主な領域は温帯ジャポニカという名前の通り、朝鮮半島から日本列島という限定的な分布になります。北への拡散時に温帯ジャポニカが生まれたのではないかと考えられています。

一方、熱帯ジャポニカは背が高くて穂・葉が長く、1株あたりの粒数が少ない。また、温帯ジャポニカは温帯でしか栽培できないのに対し、熱帯ジャポニカは、どこでも栽培できてしまう、かなり強い品種です。河川敷や後背湿地、あるいは焼畑でもできます。しかし

品 種	植物としての特性	分布・生態
温帯	背が低く。 穂・茎が短い。 一株あたりの 穂数が多し。 	中国長江流域 朝鮮～日本 水田稲：水管理が必要
熱帯	背が高く。 穂・茎が長い。 一株あたりの 穂数が少ない。 	大陸山間部・陸地等 東南アジア島嶼部 河川敷、種質混雑、後期 など乾燥地のある条件下で栽培が可能

図2 温帯ジャポニカと熱帯ジャポニカ
(守山市誌編さん委員会2005『守山市誌 考古編』より)

背が高いので、台風などが来やすい日本の地においては倒れやすく、栽培が難しい種ともいえます。収量は温帯ほどではなく食味も少し劣ります。

イネが入ったかどうかという議論だけでなく、形質面を含め各地でどのような品種が導入されたのか、導入に積極的だった人とそうでない人たちは、お互い交流関係があったのか、あるいは逆にあえてイネを取り入れなかったのか、そういうレベルまで来てイネ拡散をめぐる集団間の選択性が解明できるかもしれません。

北陸におけるイネの粒形質変化

まず、弥生時代から古墳時代の北陸を見てみます。弥生時代前期から中期の後葉ぐらいまでは比較的円粒で大型のお米です。射水市下村加茂遺跡、塊が出ている石川県杉谷チャノバタケ遺跡では円形、短粒が多いです。ところが中期の後半から後期頃になると長粒で細長く、大きいものが多くなります。古墳時代になると極端に長粒な、そして小粒なお米が出てきます。

古代も再び、場所、立地によって変化が出てきます。例えば荘園などの単位でもって納める、そのような形で品種が選択されていったことも考えられます。

先ほどの古墳時代に急激にイネが小型化する現象ですが、これは北陸に限ったことではないため、畿内の政権の力が大きく影響したと考えています。

もう1つの理由としては、弥生と古墳で米の炊き方が違うことです。弥生時代は煮沸で、今の私たちと同じです。古墳時代には甑こしきが入ってきていますの

す。弥生時代の最初、弥生時代中期後半、それから古墳時代に大きな画期があったといえます。

中世、近世は粒形が細長くなり、長粒化します。古代から引き継がれているパターンもありますが、さらに長粒でかなり大型米も出てきます。しかもそれが遺跡単位で現れます。

DNA分析からみた 日本と北陸のイネ品種の変遷

DNAは、PCRという方法が普及したことによって研究が進みました。PCRは、かなり長い塩基配列の中から、その品種を反映するところを切り抜き、増幅させて読み込んで判断しています。ですので遺伝子で分かったのが大事ではなく、遺伝子のどの部分を読んだから、こういうことが分かったというところをきちんと解釈していかないと、後から検証できなくなってしまいます。

北陸では、9遺跡73粒以上の遺伝情報が見られています。インディカ種は少なく、ほとんどがジャポニカ種でした。ジャポニカ種の中では、温帯ジャポニカ種と熱帯ジャポニカ種が半々ぐらい出ています。

時代ごとに見ていくと、イネが最初に導入された弥生時代前期の遺跡では、温帯ジャポニカ種と熱帯ジャポニカ種が混ざっています。弥生時代前期終わり頃から中期は、温帯ジャポニカ種が多い。先ほどお米の形質形態で、弥生時代の前期とその後でだいぶ差があるという話をしましたが、どうやら熱帯ジャポニカ系が混ざった状態で入ってきたのが、だんだん灌漑水田用に温帯ジャポニカ系に収斂されていったの

かもしれません。北陸では、高岡市下老子笹川遺跡の弥生時代中期の遺構から出たものも、ほとんどが温帯ジャポニカ種です。

ところが後期になると逆転して、熱帯ジャポニカ種になります。射水市愛宕遺跡や氷見市上久津呂中屋遺跡では、温帯と熱帯が半々、あるいは熱帯の方が多くなります。福岡県板付遺跡のような前期のお米と、北陸の中期後半や終わりから出てくるお米とは形質が違ふということがわかります。

古墳時代になると、弥生時代中期や終わりと同様、熱帯と温帯がほぼ半々で出てきます。それぞれ栽培されているということです。

古代から中世には、西日本や朝日町竹ノ内Ⅱ遺跡、高岡市・小矢部市石名田木舟遺跡など、温帯ジャポニカが増えていきますが、北方の開拓地のような地域では長粒米、熱帯ジャポニカが、かなりを占めます。

以上、北陸では粒形質、DNAともに弥生時代前期、弥生時代中期後半、古墳時代、中世に画期があります。変化の内容は西日本に対応しています。また、品種は粒の形質にも関連しています。温帯ジャポニカは円粒米、熱帯ジャポニカは比較的長粒米に関係があります。

弥生時代中期の後半から末、中世において長粒米が増加します。理由は、この時期、寒冷化が訪れたことです。先ほど出た青森県垂柳遺跡、北限の大規模な水稻農耕を行っていたこの遺跡は中期の後半を境に途絶え、それ以降約300年間お米の栽培は行われなくなります。社会的な現象ではなく、気候の影響が強かったのだらうと推測できます。

中世になると、かなりの大型米、長粒米が出てくるのですが、これを示唆する現象が文献に残っています。チャンパ米、あるいは占城米とも呼ばれているものです。早稲の赤米で細長ですが、虫害や日照りに非常に強く、痩せた土地や耕起していない水田でも育ちます。ただし、食味は淡泊と書いてあります。強い品種であるため、白米を駆逐してしまいます。中世は寒冷期ですので、寒冷期に育つ赤米は喜ばれました。領主たちも米は兵糧として大事

ですので、盛んに栽培していましたが、おいしい白米が赤米と混ざってしまうと困ります。ですので、遺跡単位で赤米のような大型長粒米を育てたところと、円粒の白米が育てたところが分かれていたと考えられます。

同位体比からみた イネ品種の変遷

イネにはいろんな成分がありますが、特に私たちが注目しているのは炭素・窒素安定同位体比です。考古学では人骨の食性分析で魚やどんぐり、動物など、生前どういうものを多く食べていたかを調べるのに使われています。

イネ自体を分析してみると品種間でも違いがありますが、特に生育環境によって大きな差があるようです。窒素同位体は、水稻と陸稻でだいぶ差があることが分かっています。陸稻は、熱帯ジャポニカ系が多く、強い品種だから比較的粗放に栽培された一方、温帯ジャポニカは水稻で肥料が与えられており、かつ肥料の種類によっても成分が変わります。そういった過去の生育環境がお米1粒からでも分かります。

出土イネの出土状況からみた 貯穀と調理

最後に収穫したお米を、どういう食べ方、貯蔵がされていたかです。

お米の塊といっても、遺跡からは炭化物の黒い塊として出てきますので、これをレントゲンやCTで観察します。

出土イネは弥生時代には圧倒的に住居や土坑でみつかりますが、ほとんどが熟で膨張していたり籾殻がありません。玄米の状態で作っていたものが焼けたと考えられます。炉から大量に出てくる例もあります。不慮の火災もありますが、家を終わりにするときにお米を撒いて火を放つという儀式的なものかもしれません。

穂と籾を分けるのが脱穀です。脱穀をした後は、籾打ちをします。昔のお米は芒が長く、舂で測った時かさばって正確に計量できないので、領主たちは俵に詰める前に全部芒を取るようなという指示を出しています。

農村集落を調査すると籾片がついたまま出てくる例が多いのですが、穀倉が焼けてしまった場合、穂ではなく籾

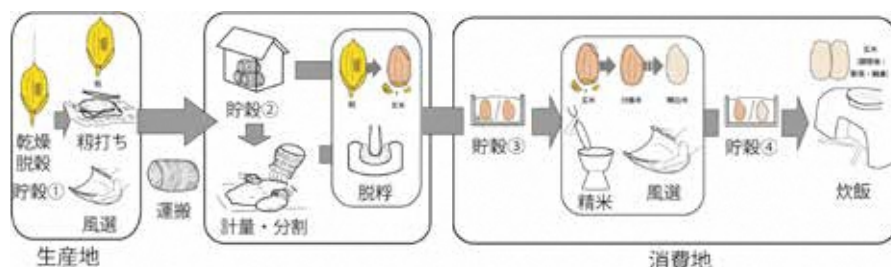


図3 出土状況の分類

の塊が出てくることがあります。また、米を調整する作業場などからは籾とセットで出てきたりします。

脱粃直前、芒や枝梗を除去した状態は、穀倉から出てくる例が多く、固まって出てきます。中世後期の富山市西二俣遺跡のものは、籾殻がくっついている状態で出てきているので、焼け落ちてしまった倉だと思います。

お米を食べるには、脱粃によって籾殻から籾を外して、玄米にします。玄米をさらに磨くと白米になっていく。これを精米と言います。このようなお米は、家の小さい土坑から出てくる例が多いです。磨くのは土間などで臼を使っていると考えられます。一般的に食べる直前に食べられる量だけを磨くのですが、白米にしまうと虫がつきやすく、腐りやすいからです。

脱粃・精米を行ったと思われる遺構も見つかっています。圧倒的に竪穴建物内に多く、特にカマド周辺から出てきます。絵巻物には、カマドの横に臼が描かれています。今は臼と言うと餅つきですが、昔は脱粃・精米用もありました。餅つき用の臼は米粒を潰さなければいけないので底が丸く、杵の先は径が大きくて平らです。ところが脱粃・精米用の臼は、底が尖がっています。お米を搗いたときに表面だけを磨くように、杵も先を細くして中で玄米が循環する工夫がされています。

炊き終わった後のものもあります。お米は、もともと筋が入っていますが、炊いた後は水を吸っているため膨張して筋がなくなります。蒸籠の型枠の跡がついた平らなものは、蒸された状態で焼けたと思われます。丸い形をしているものは、曲物に入れて蒸されています。古代、中世にはお米を蒸するのが主流だったようです。

杉谷チャノバタケ遺跡のものは、おにぎりだと思うのですが、ぎゅっと潰

したのか、何かで包んであったものが焼けてしまったのかはわかりません。お米を丸い団子状にした例もいくつかあります。アワとお米を混ぜて糧を増やした、アワ飯も出ています。富山県では中世後半の高岡市・小矢部市石名田木舟遺跡でおにぎりが出土しています。CTで見ると粒がばらばらの向きで、膨張して変形しています。

まとめ

大きく分けて5つになります。

まず粒の形ですが、北陸には少なくとも弥生前期、弥生中期、古墳、中世の4つの画期があります。この変化は、日本列島のある品種の拡大、普及や気候の変化、立地などに対応しています。

それから粒の形というのは、DNAの成果とも比較的整合的です。

古代までは白米が主で一部で赤米が栽培されていますが、中世になると長粒米が一気に普及してきます。ただし、その栽培場所は限られたところで行われていたと考えます。また、この長粒米は赤米であった可能性があります。

出土イネの炭素・窒素安定同位体比の差は、生育環境を反映しています。列島のそれぞれの地域の土質、あるいは品種とも対応してきます。

炭化米の塊は、調理後のおにぎりだけを示すものではないということです。貯蔵状態だけでも大きく4段階に分けられます。炭化米の塊が出てきたから、おにぎりや即断せず、出土状態や表面の詳細な観察、CTによる内部観察などから評価していくことが重要です。その結果、炭化米の塊というものが改めて評価され、さらにそれが分かることで食文化というものが見えてきます。今後、そういった研究が進んでいくことを期待しています。

(令和6年11月10日

第4回 県民考古学講座)

展示室



縄文土器
【境A遺跡】

阿弥陀三尊像
【石名田木舟遺跡】



縄文土器【境A遺跡】

企画展「見て、知って! とやまヒストリー 2025」

令和7年4月18日金～9月25日木

富山県の旧石器時代から近現代までの通史について、県内各地で発掘調査された出土品を通して分かりやすく紹介します。

展示を見て楽しく歴史を学びましょう。社会科の学習にもご活用ください。



土偶【長山遺跡】

特別展「とやま歴史万博(仮)」

令和7年10月10日金～令和8年1月25日金

我が富山の先人達が築き上げてきた技術・芸術を各時代のパビリオン風に紹介します。

ミニ企画

「市町村連携発掘速報展」

「春の虫干会—重要文化財の風通し—」

令和8年1月31日土～4月5日金 予定

県内で近年実施した発掘調査の出土品や研究成果を展示します。

また、当センターが所蔵する国重要文化財「境A遺跡出土品」や登録有形文化財などの定期点検を兼ねて、風通しの様子を公開します。

収蔵展示室

常設展示「小竹貝塚展」

日本海側最大級の貝塚で、縄文時代前期という古い時代の埋葬人骨が、91体出土しました。土器や石器のほか、木器や骨角器など多くの出土品を展示しています。併せて平成30年度から開始した「MAIBUN 小竹貝塚研究プロジェクト」の最新成果も公開しています。



骨角器【小竹貝塚】

県民考古学講座

考古学の入門から近年の発掘調査成果まで、当センターの職員のほか、著名な講師を迎え、分かりやすく解説する講座です。

令和7年度は、7月より全6回の開催を予定しています。

考古学少年団

考古学の簡単な解説や体験活動を通して、富山の遺跡・出土品や歴史を、考古学の専門家の指導で楽しく学ぶことを目指しています。考古学を学んでみたい方、本物の土器や石器に触れてみたい方、団員になってみませんか。

年間10回程度開催【対象：県内の小学6年生～中学3年生】

第2位

惣領野際ムラの
槽(田舟)
70票



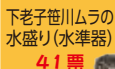
第3位

蔵野町東ムラの
装飾器台
46票



第4位

下老子笹川ムラの
水盛り(水準器)
41票



第1位

江上Aムラの
ヒスイ勾玉
113票



第5位

惣領浦之前ムラの
朱漆塗り盾
37票



第6位 木製短甲(江尻ムラ)
33票

第7位 団扇形木製品の柄
(下老子笹川ムラ)
32票

第8位 皮袋形土器
(下老子笹川ムラ・愛宕ムラ)
20票

他にこんな意見も…

「ガラス玉
キレイ!」 「惣領浦之前ムラの臼。
その時が目に浮かぶ…」

「炭化米すごい」

「惣領野際ムラと蔵野町東ムラの琴」

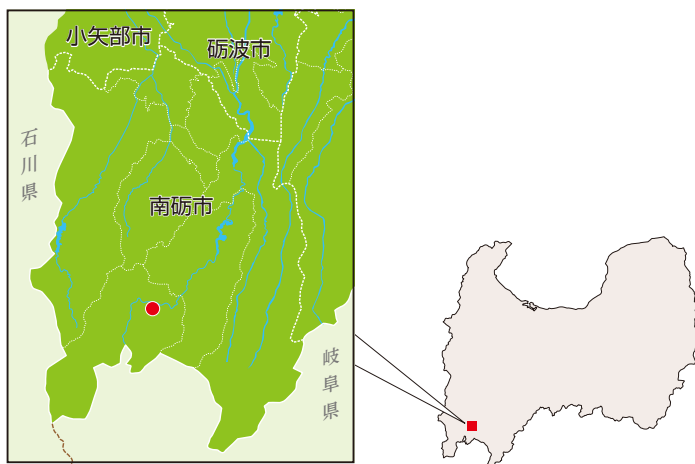
「下老子笹川ムラの弥生中期の大型壺」

「富山の弥生時代のすごさに一票!」

と・YAMATAI 国の ムラ自慢コーナー 結果発表!

すごい!と思った出土品に1票を投じていただきました

古写真発掘!—《24》



ほそじま 細島遺跡

昭和53年（1978年）撮影 南砺市上平細島

細島遺跡は、旧上平村の庄川右岸、標高約340mに立地します。すぐそばを庄川が流れ、昭和17(1942)年に完成した小原ダムが近くににあります。昭和40年の遺跡地図には、すでにその名前があるほど古くから知られている遺跡です。

ほ場整備と国道156号の改築工事に先立ち、昭和53(1978)年に試掘調査が行われました。調査の結果、縄文時代の土坑や縄文土器、中世の珠洲等が見つかりました。

上の写真は、国道156号の予定地でレトロな工事看板のほか、奥にはかすかに庄川が見えます。土が筋状に積みあがっているところが試掘箇所です。下の写真は、トレンチを掘削している様子です。

156号や304号といった国道が整備されたことにより、観光地としてもとても訪れやすくなった五箇山ですが、縄文時代の遺跡が数多くあります。山深い地で何千年も前に縄文人が暮らしを営んでいたことがわかります。

編集後記

最近、年のせいか電子媒体の本を読むのがつらくなり、紙の本を読もうと思い立ちました。都合よく、職場の向かいには富山県立図書館がある!と早速、読みたい本を検索すると全て貸出し中。一瞬ガクッとしましたが、今、借りている方は何故この本を知ったのだろう、読み終えるのにどのくらいの時間がかかるのかなどと考えていると、待つ間も楽しくなりました。

(担当 青山)

富山県埋蔵文化財センターニュース「埋文とやま」VOL.170

令和7年3月31日発行 編集／富山県埋蔵文化財センター 〒930-0115 富山市茶屋町206-3 TEL076-434-2814

URL <https://www.pref.toyama.jp/3041/miryokukankou/bunka/bunkazai/maibun/index.html>



この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

